

芸能実演家・スタッフの実態調査

● 調査概要

「芸能実演家・スタッフの活動と生活実態調査」(以下、実態調査と表記)は、俳優・音楽家・舞踊家・演芸家など、芸能実演家の実状を把握するために、芸団協が1974年から5年ごとに実施しているアンケート調査です。

以来、政府統計などでは捉えきれない、芸能分野に特化した調査として継続され、第7回(2004年度)からスタッフ部門についても調査を開始。また、アニメーターを対象とした調査も実施されるようになりました。

わが国のコンテンツ産業として注目されている音楽、映像、アニメーションなどの創造を支える人々の実状を知る調査として、重要なものとなっています。

調査のはじまり

1965年に俳優・音楽家・舞踊家・演芸家などが集まって創設された芸団協では、異分野の実演家との議論を重ねる中で、様々な実状があることが明らかになりました。「わが国の芸能文化を支えている芸能実演家の実状を実演家自らが正しく知り、そのあるがままの姿と、その中にあるいろいろな問題点を社会に伝達することが私たちの責務」として、アンケートから実態を把握する定期調査に着手しました。

第9回調査(2014年度実施)

	実演家部門	スタッフ部門
調査対象者	芸団協の正会員団体を構成する個人	芸団協正会員団体および映像関係職能団体に所属する個人**
調査方法	郵送法(一部団体発送)	郵送法(一部団体発送)
抽出方法	団体名簿による割当法*	団体名簿による割当法
調査期間	2014年8月1日(金)～8月31日(日)	2014年8月1日(金)～31日(日)
発送数	6,941	1,440
総回収数	1,615	334
有効回収数	1,603	329
有効回収率	23.1%	22.8%
調査協力機関	株式会社インテージリサーチ	株式会社インテージリサーチ

* 正会員団体を8つの分野に分類。

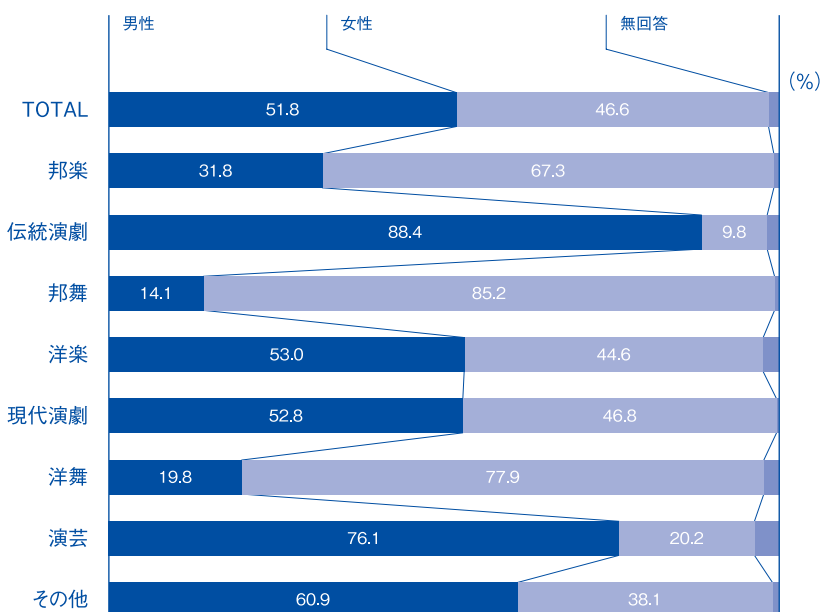
** 映像関係職能団体8団体のうちシナリオ作家協会は現場スタッフではないので対象外。

実演家

実演家の回答者を8つのジャンル別にみると、邦楽、邦舞、洋舞で女性が多く、教授業を行っている割合が高くなります。一方、伝統演劇、演芸は男性が多く、舞台での公演活動を行う割合が高くなっています(図5:活動別収入の割合を参照)。

本アンケートの回答者の平均年齢は54歳。これは、アンケート送付対象者を芸団協正会員団体に属する方を対象としているため、団体に所属する人の高齢化が進む一方で、若年層が団体に所属しない傾向が強いことが背景にあります。

図1：性別

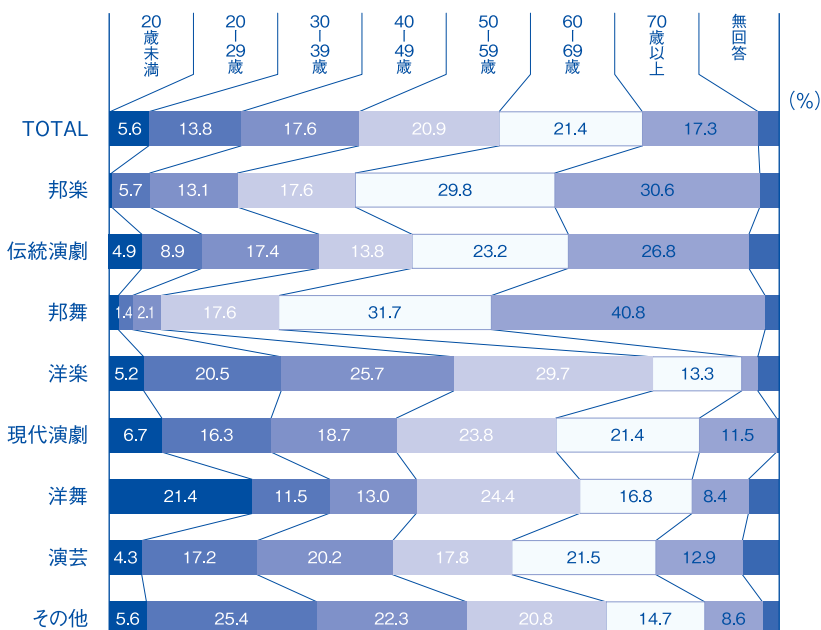


回答者属性

邦楽(245)	15.3%
伝統演劇(224)	14.0%
邦舞(142)	8.9%
洋楽(249)	15.5%
現代演劇・メディア(252)	15.7%
洋舞(131)	8.2%
演芸(163)	10.2%
その他(197)*	12.3%

*演出、演劇等の制作、
オーケストラ・バレエ団事務局

図2：年齢



● 仕事の動機(複数回答)

現在の仕事をするようになった動機は、「とにかくやりたくて(42.2%)」が最も多く、次いで「自分の素質や才能を活かせると思ったから(33.3%)」です。ジャンル別にみると、動機にばらつきがあります。「邦楽」、「伝統演劇」、「邦舞」は、家族や周囲の環境

の影響が大きく、「洋楽」は、「才能を活かせると思った」が圧倒的に多くなっています。「演芸」と「現代演劇・メディア」は、「とにかくやりたくて」と「才能を活かせると思った」が共に高く、意欲と自信が強い動機となっています。

図3：仕事の動機

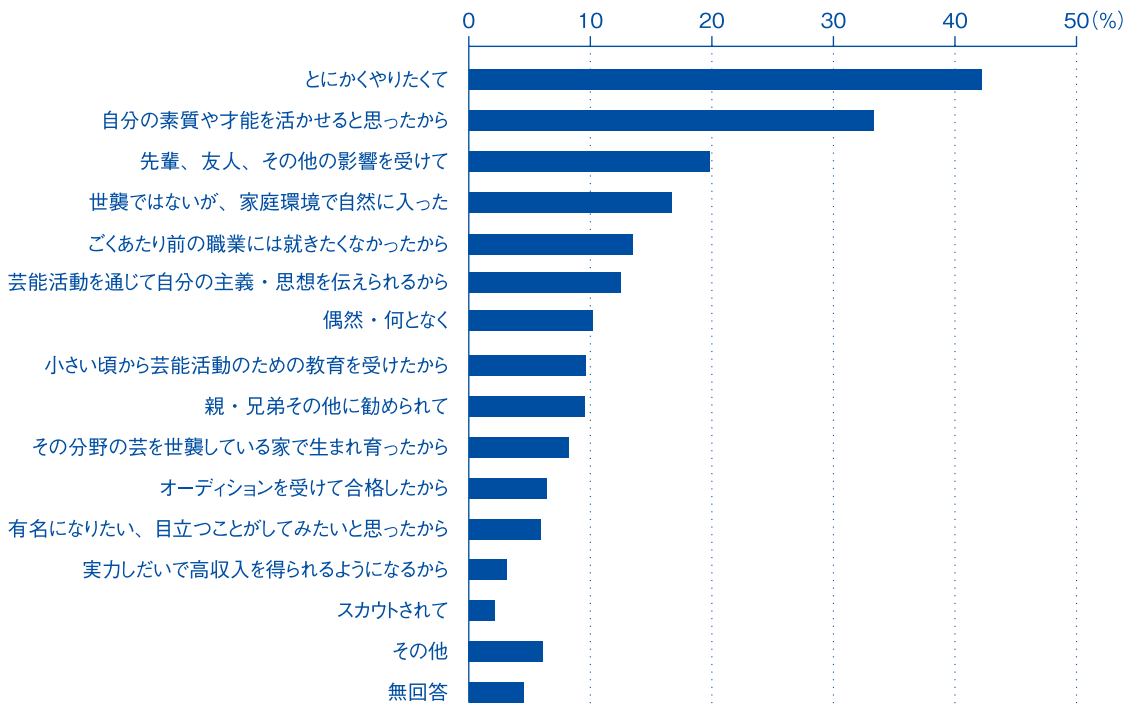


表1：仕事の動機(図3データ)

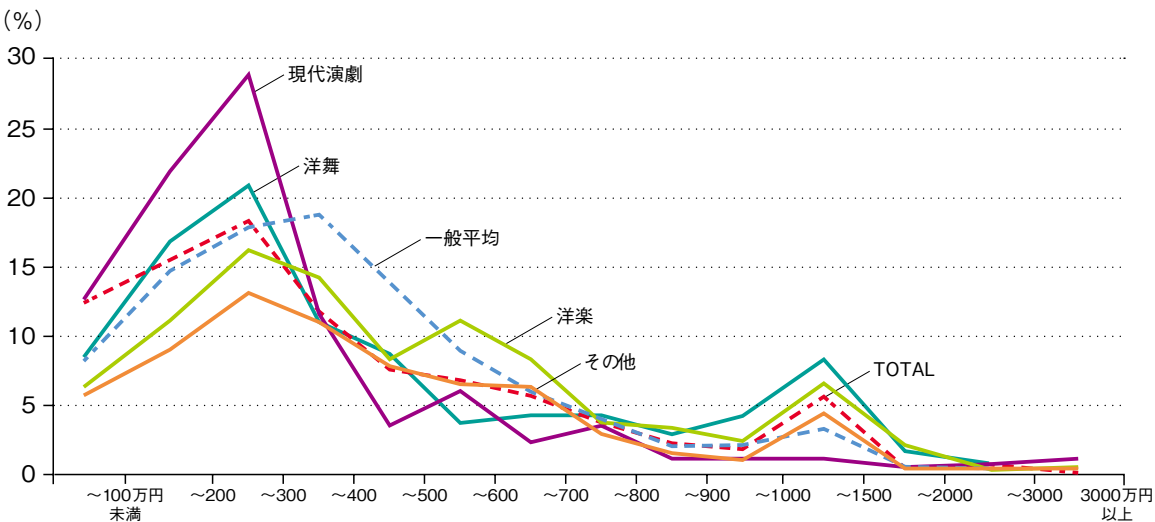
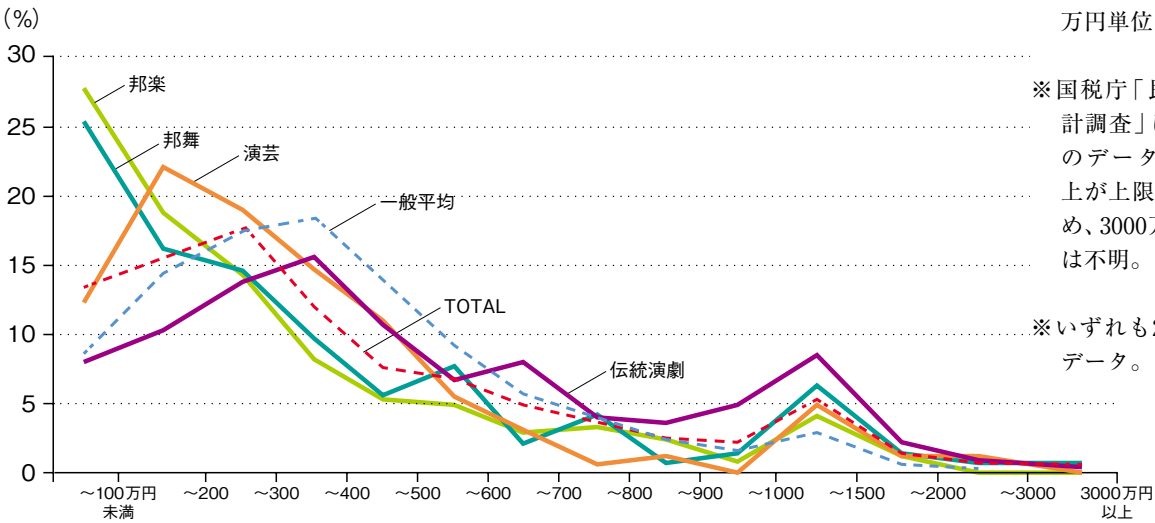
	TOTAL	邦楽	伝統演劇	邦舞	洋楽	現代演劇	洋舞	演芸	その他
とにかくやりたくて	42.2	26.9	25.0	25.4	49.8	59.5	54.2	62.0	37.1
自分の素質や才能を活かせると思ったから	33.3	21.6	17.9	21.1	55.0	39.7	31.3	41.7	32.5
先輩、友人、その他の影響を受けて	19.8	26.5	22.8	15.5	24.5	13.1	20.6	15.3	17.3
世襲ではないが、家庭環境で自然に入った	16.7	34.3	20.5	26.8	16.9	6.7	12.2	8.0	5.6
ごくあたり前の職業には就きたくなかったから	13.5	5.7	9.8	2.8	13.3	21.0	13.7	28.2	13.2
芸能活動を通じて自分の主義・思想を伝えられるから	12.5	5.7	5.4	12.0	13.7	17.5	16.8	19.0	13.2
偶然・何となく	10.2	13.5	10.3	10.6	7.6	5.6	9.2	12.3	13.7
小さい頃から芸能活動のための教育を受けたから	9.6	6.9	12.9	23.2	11.6	3.6	19.1	3.1	3.6
親・兄弟その他に勧められて	9.5	15.9	16.1	16.2	7.6	6.0	6.9	4.3	2.5
その分野の芸を世襲している家で生まれ育ったから	8.2	10.2	30.4	18.3	2.0	0.8	3.1	1.2	0.0
オーディションを受けて合格したから	6.4	2.4	0.9	0.0	18.1	10.3	9.9	2.5	3.0
有名になりたい、目立つことがしてみたいと思ったから	5.9	0.8	3.1	0.0	4.4	14.3	4.6	15.3	3.6
実力だけで高収入を得られるようになるから	3.1	0.0	2.2	0.0	3.6	7.1	0.8	8.6	1.0
スカウトされて	2.1	0.4	0.4	2.1	2.8	5.2	0.0	1.8	3.0
その他	6.1	5.7	6.7	10.6	4.0	5.6	3.8	4.3	9.1
無回答	4.5	3.7	0.9	3.5	1.2	1.6	0.0	1.2	23.9

● 収入の実態

一般平均と実演家の平均(TOTAL)の収入分布をみると、400～700万円の層は一般平均の割合が高くなっていますが、700万円以上の層は実演家の方が高い傾向があります。実演ジャンルごとの分布をみると、いずれも200万円未満の層が多くみられます。その多くは、若い世代の実演家や、舞台に立たず教える仕事を中心に行っている女性などです。能

や歌舞伎といった伝統演劇は、全体よりも収入分布が高い傾向になっていますが、これは、10年を超える長い修業期間を経た上で活躍する基盤が一定程度確保されていることが要因と考えられます(表2参照)。現代演劇は、300万円未満の層が突出していますが、3000万円以上までの各層に分布しています。

図4：収入分布



● 収入の構造

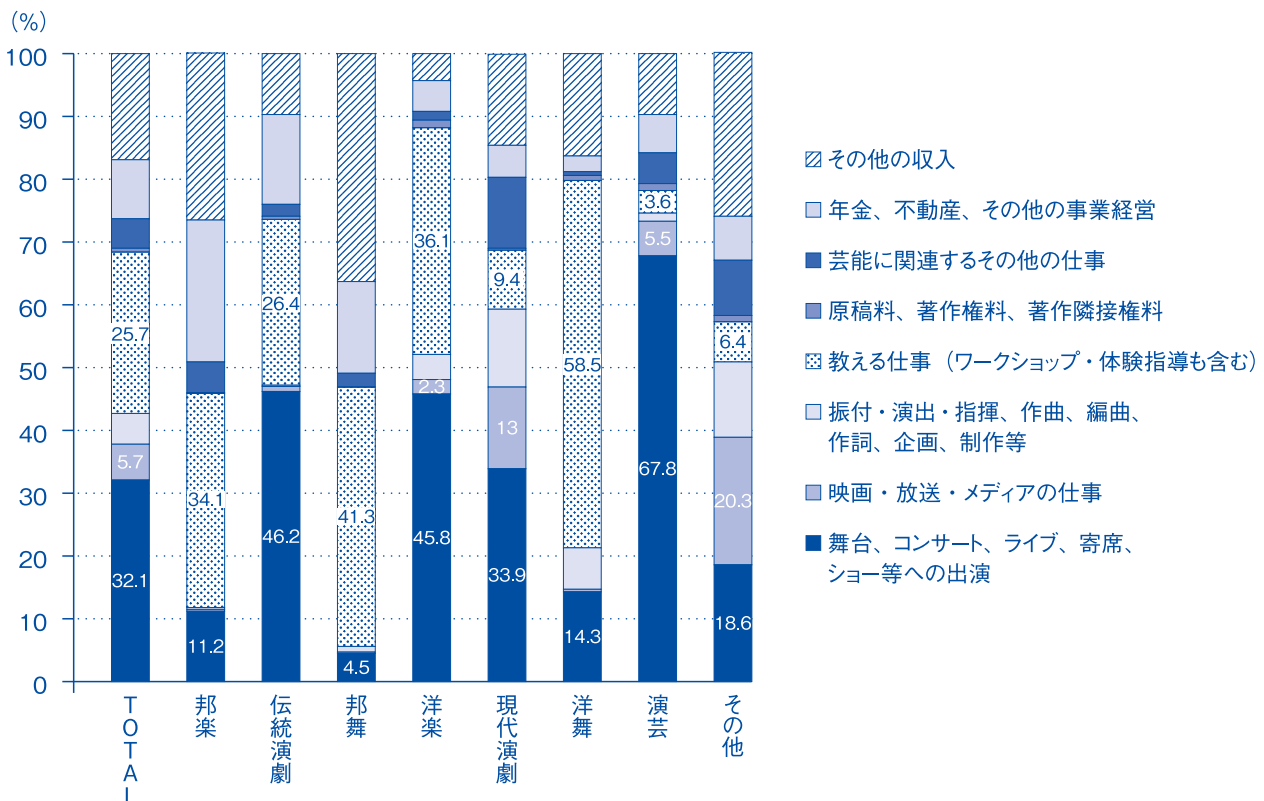
仕事の内容別に2013年に得た収入の割合を回答してもらいました(図5)。ジャンルごとの平均値をみると、全体では「舞台、ライブ等への出演」が最も多く32.1%、次いで「教える仕事」が25.7%となっています。特徴としては邦楽、邦舞は舞台よりも「教える仕事」での収入の割合が大きく、実演以外の収入

が半分を占めています。現代演劇は「映画・放送・メディア」が13%と他のジャンルより高く、演芸では「舞台、ライブ出演」が67.8%と突出しています。もちろん個人によって違いはありますが、過去の調査からもジャンルごとの収入構成は同様の傾向となっています。

表2：修業を始めてから報酬を得られるようになるまで

	平均年齢(歳)	平均経年数(年)	初報酬後の平均年数(年)	無報酬期間
TOTAL	54.0	37.0	26.6	10.4
邦楽	61.5	42.6	25.4	17.2
伝統演劇	57.8	40.7	29.7	11.0
邦舞	65.6	53.9	35.1	18.8
洋楽	47.5	34.7	24.8	9.9
現代演劇・メディア	51.6	30.4	26.5	3.9
洋舞	47.8	35.7	22.4	13.3
演芸	52.3	30.6	27.4	3.2
その他	48.5	28.8	21.8	7.0

図5：活動別収入の割合



● 地域別特性と仕事の状況

関東地方、近畿地方、沖縄県、その他の地域ごとの集計をみると、2013年の1年間に行った行動では、マスメディアの多い「関東地方」で「映画・放送・メディアへの出演・演奏」への回答割合が他の地域よりも高くなっています。「沖縄県」では、「舞台等への出演」と「出演の稽古」の割合が高い一方、「芸能活動以外の仕事」も31.2%が回答。「その他」の地域では、「教える仕事」の割合が他の地域よりも高く、地域による仕事の場の違いがみられます。

「安心して活動できるための必要条件」については、「関

東地方」で「文化芸術に対する公的支援の充実」、「老後の年金制度の充実」、「けがや病気の補償」の割合が他地域よりも高くなっています。「近畿地方」と「その他」では、「公共劇場が文化拠点として機能すること」が高く、劇場の役割への期待がうかがえます。「沖縄県」では、「研修への支援」、「練習場の確保」、「学校での芸能の教育の機会」の割合が他地域よりも高くなっています。地域によって活動の場や社会環境に特性があること、また、それぞれの直面する課題が異なることが、こうした傾向の違いからもみられます。

表3：2013年の1年間に行った行動(いくつでも)

	TOTAL	関東地方	近畿地方	沖縄県	その他
舞台、コンサート、ライブ、寄席、ショー等への出演	76.9	75.5	81.4	83.1	74.9
舞台、コンサート、ライブ、寄席、ショー等出演の稽古	68.2	67.7	67.8	76.6	68.0
映画・放送・メディアへの出演・演奏	28.8	36.0	25.7	9.1	18.3
映画・放送・メディアへの出演、演奏のための稽古	16.6	20.7	14.1	9.1	10.3
振付・演出・指揮、作曲、編曲、作詞、台本執筆など	25.2	27.2	19.0	14.3	28.3
企画・プロデュース・制作	17.3	17.9	14.5	6.5	20.9
教える仕事(ワークショップ・体験指導も含む)	63.1	60.6	64.3	51.9	70.9
芸能に関連するその他の活動	22.0	21.4	22.5	27.3	21.7
技能を維持するための研鑽、トレーニングなど	46.0	46.5	49.8	37.7	43.1
芸能活動以外の仕事	23.5	23.6	20.9	31.2	23.7
無回答	5.6	5.1	6.8	3.9	6.0

表4：安心して活動できるための必要条件(3つまでの回答)

	TOTAL	関東地方	近畿地方	沖縄県	その他
発表や公演、出演の機会が多くあること	49.8	50.8	55.6	51.9	41.7
報酬額や就業時間など仕事の条件が良くなること	38.7	41.3	38.3	36.4	33.1
文化芸術全般に対する国や自治体による公的支援の充実	31.2	32.6	25.4	27.3	33.7
老後の生活のために年金制度が充実すること	22.7	25.0	22.5	18.2	18.3
文化芸術全般に対する社会の理解や信用が深まること	21.3	24.9	16.7	6.5	19.7
学校において芸能等の教育機会が十分組み込まれること	17.5	15.7	18.6	24.7	19.1
公共劇場等が地域の文化拠点として機能すること	17.2	13.3	22.8	15.6	22.0
使いやすい練習場、撮影所などが十分確保されること	14.9	12.6	16.7	28.6	16.0
効果的な研修の提供等、技術・技能向上に関する支援	13.7	12.7	9.6	20.8	18.0
仕事でけがや病気をした時の補償が充実すること	12.7	14.5	11.6	7.8	10.6
仕事に関する情報提供等、就業に関する支援があること	11.0	11.7	10.3	10.4	10.3
業界団体などによる支援活動の充実・強化	10.9	10.2	11.3	9.1	12.9
失業した時の補償が充実すること	10.5	12.5	9.3	6.5	7.4
その他	2.3	1.7	1.6	1.3	4.6
無回答	3.2	2.1	3.9	5.2	5.1

スタッフ

● 回答者属性

映画や放送などの映像、そして舞台やコンサートなどのライブの現場では多くのスタッフが働いています。実演芸術を支えるプロフェッショナルとして、職能団体に所属するスタッフの仕事の状況を調査しました。回答者の8割以上が男性で平均年

齢が55.1歳となっていますが、若年層や女性の協会への加入率が低いことがこうした結果に繋がっている一因です。しかし、実際の現場では女性や20代、30代も多く就業しています。

図6: もっとも比重の大きい活動分野

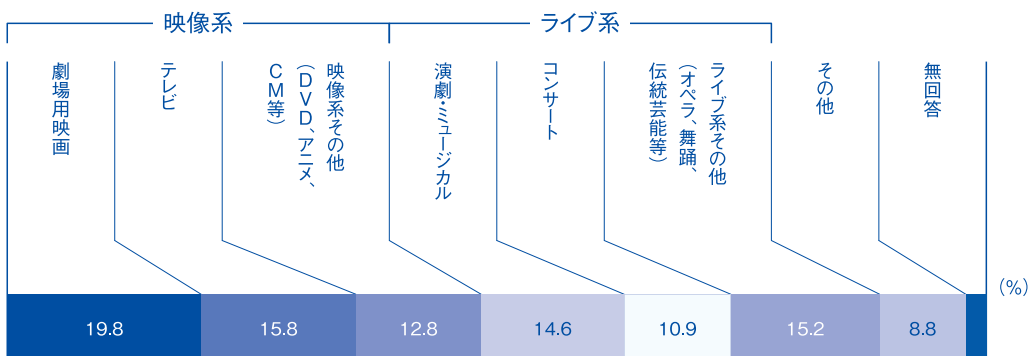
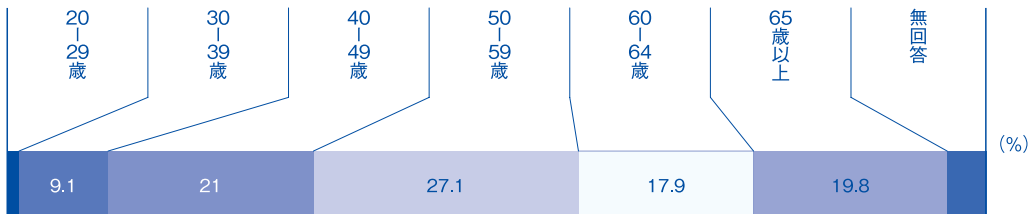


図7: 性別



図8: 年齢



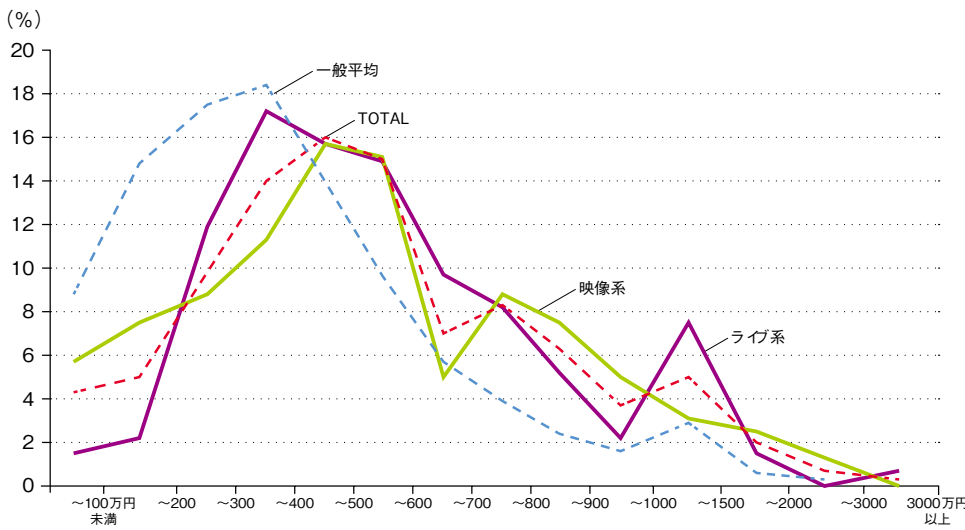
● 収入

スタッフの収入分布は、一般的な勤労者の分布に近くなっています。回答者の8割以上が男性で熟年層ということもあり、スタッフ平均の収入分布は、一般平均よりも高い層に山がきていますが、映像系もライブ系も個人によるバラつきが大きいいため、分布の凸凹がみられます。200万円未満には、定年後に単発で収入を得るような形態も含まれます。

● 雇用形態

スタッフの雇用形態について、「フリーランス」は、映像系で62.9%と多くなっていますが、ライブ系では、23.1%に留まります。ライブ系では、正社員・正職員(38.1%)、会社経営(28.4%)の割合が高くなっています。作品ごとに個別スタッフが集められる映像系と、照明や音響などチームで現場に入るライブ系との違いによるものと考えられます。

図9：収入

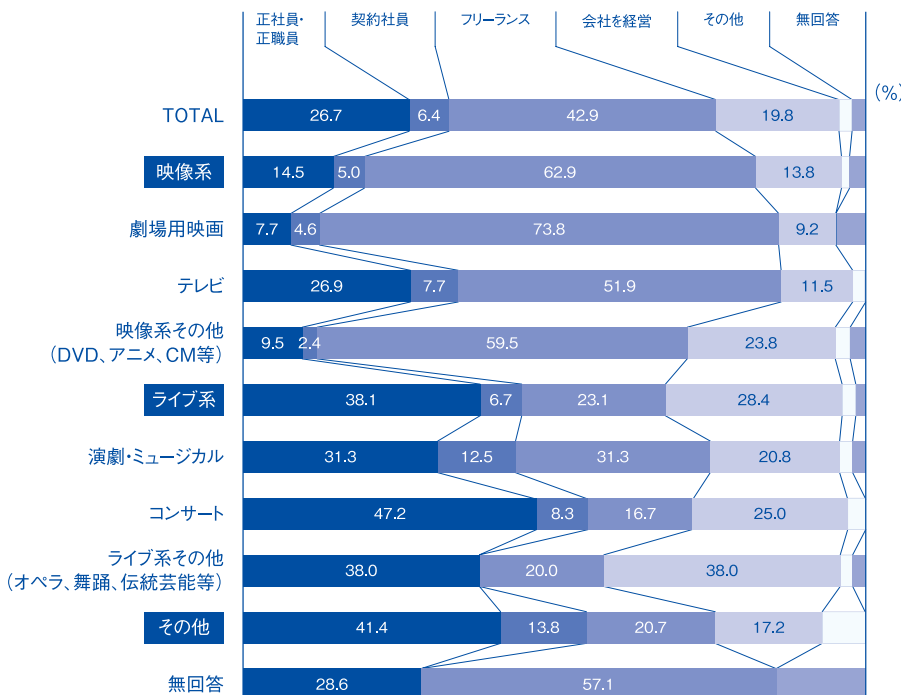


※横軸は、1000万円までは100万円単位、以降は500万円単位となっている。

※国税庁「民間給与実態統計調査」による一般平均のデータは、2500万円以上が上限となっているため、3000万円以上の分布は不明。

※いずれも2013年の収入のデータ。

図10：雇用形態



● 技術・技能を向上させるため

技術・技能を向上させるためにどんなことが必要か、最大3つまで選択してもらったところ、映像系、ライブ系で多少の差異があるものの、「様々な分野の舞台、映像制作に従事する機会があること」(42.6%)、

「プロのための研修が充実すること」(41.3%)、「技術・技能向上のための研修奨励金があること」(37.7%)、「分野を超えた芸能実演家等と交流機会の充実」(37.1%)を求める割合が高くなりました。

図11：技術・技能を向上させるための必要条件(3つまでの回答)

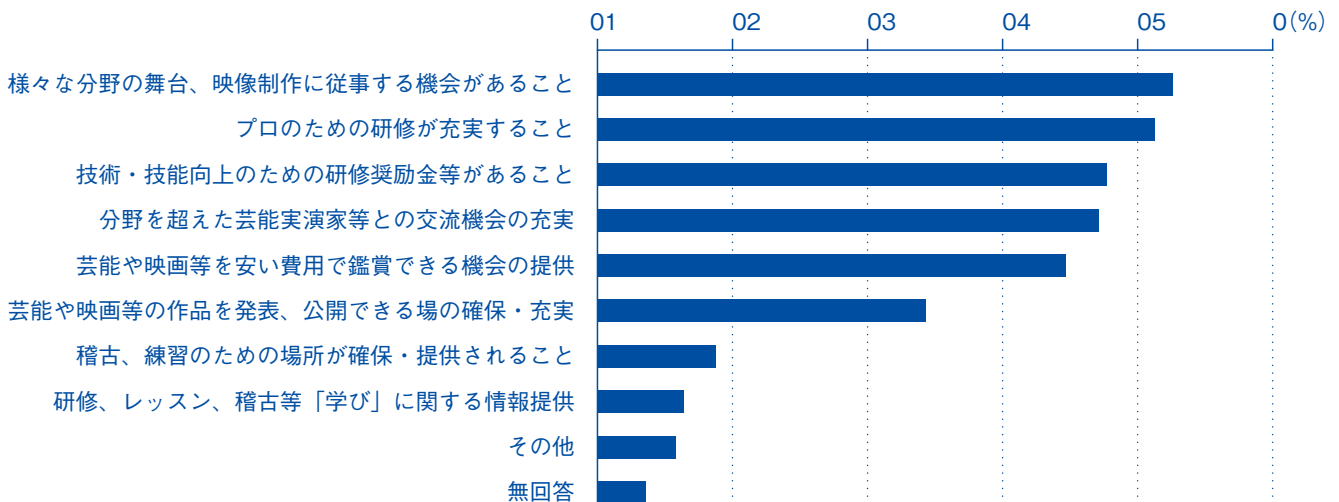


表5：技術・技能を向上させるための必要条件(3つまでの回答)

	TOTAL	映像系	ライブ系	その他	無回答
様々な分野の舞台、映像制作に従事する機会があること	42.6	47.2	38.1	34.5	57.1
プロのための研修が充実すること	41.3	39.0	43.3	44.8	42.9
技術・技能向上のための研修奨励金等があること	37.7	33.3	42.5	44.8	14.3
分野を超えた芸能実演家等との交流機会の充実	37.1	43.4	30.6	37.9	14.3
芸能や映画等を安い費用で鑑賞できる機会の提供	34.7	38.4	33.6	24.1	14.3
芸能や映画等の作品を発表、公開できる場の確保・充実	24.3	32.7	17.2	13.8	14.3
稽古、練習のための場が確保・提供されること	8.8	3.8	14.9	10.3	0.0
研修、レッスン、稽古等「学び」に関する情報提供	6.4	3.8	5.2	24.1	14.3
その他	5.8	1.9	7.5	13.8	28.6
無回答	3.6	3.1	3.0	6.9	14.3

実演家・スタッフ

● 仕事上の傷害(ケガ)と補償

2013年の1年間に仕事上の傷害を経験したのは、いずれも9%程度で、芸能実演家145人、スタッフ30人です。傷害の発生率が高い場所は、実演家は「稽古場」、「舞台・ステージ」の順となり、スタッフは「舞台・ステージ」、「ロケ現場」となっています。治療

費の負担をみると、実演家・スタッフともに「自分で負担した」割合が高くなっています。被雇用者の割合が高いはずのスタッフも、労災保険の適用は少ないようです。治療費以外の補償については、「何もない」が圧倒的に多くなっています。

図12: 昨年1年間に経験した仕事上の傷害発生場所

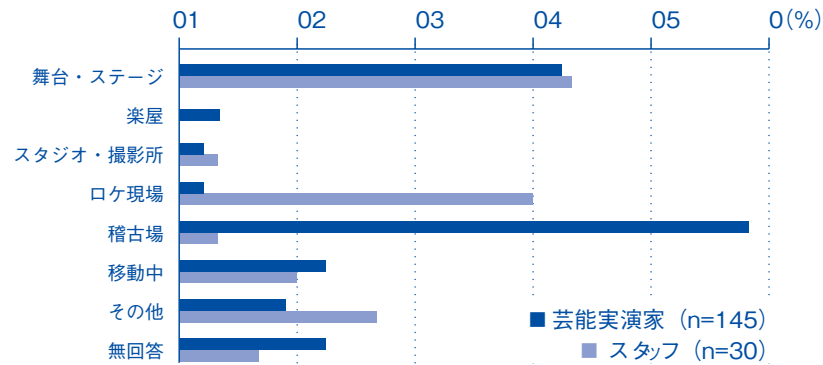


図13: 昨年1年間に経験した仕事上の傷害治療費等の負担状況

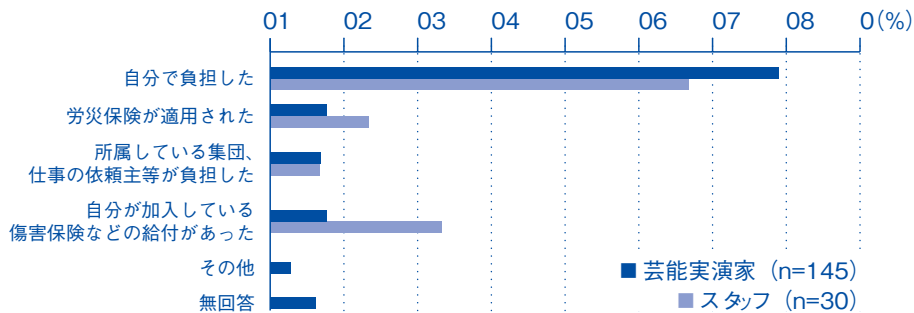
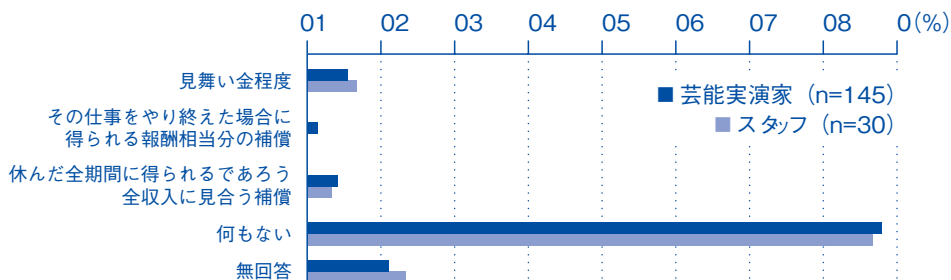


図14: 昨年1年間に経験した仕事上の傷害に対する治療費以外の補償状況



● 働く目的

働く目的として、同項目について世論調査(2014年)で一番大きな割合を占めるのが「お金を得るために働く」(51.0%)です。同項目について実演家(20.3%)、スタッフ(31.9%)ともに社会一般より低くなっています。代わって、「自分の能力や才能を発揮するために働く」が実演家(37.4%)、スタッフ(36.5%)とも高くなっています。

参考:「国民生活に関する世論調査」(2014年6月)

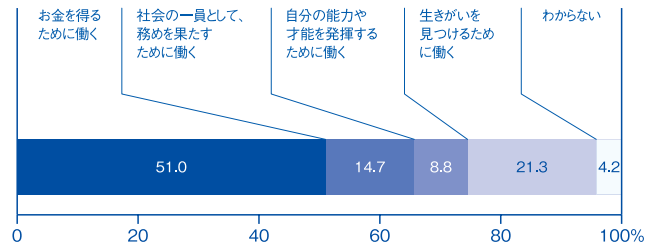


図15: 働く目的(実演家)

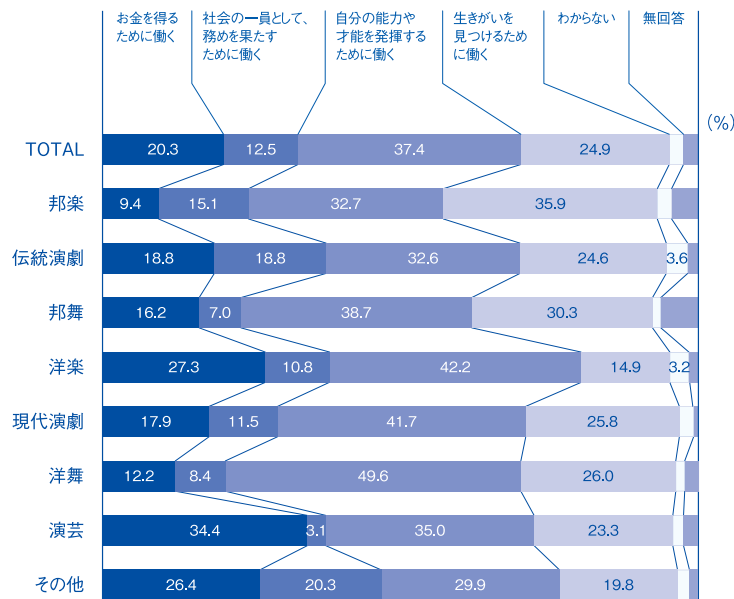


図16: 働く目的(スタッフ)

